

I-8. ICF-CY に期待すること—家族の視点から—

キーワード ICF-CY 家族 コード

1. 家族を背景にした子ども

ICF-CY はその前文で、子どもの生活機能にとって家族の存在がいかに大きいかを述べている。「子どもの生活機能は、家族等ごく近しい限られた社会的環境との相互作用によって左右される。よって、子どもの生活機能は、“家族を背景にした子ども”として評価されるべきであって、そこから分離して評価されるものではない。⁶⁾」

このことは、障害のある子を持つ親である私にとって、非常に重要な意味をもつ。私事だが、そもそも私が ICF にひきつけられたのは、環境因子のひとつに、医師や教師と並んで「家族」という項目を発見したからに他ならないからである。同じような障害のある子どもでも、私のように落ち着きのない親に育てられた子どもと、穏やかで辛抱強い親に育てられた子どもは大きく違う。障害のある娘と向き合いながら、そのことについて身をもって思い知らされていた私にとって、環境因子 *e310* 家族の項目は重い意味をもって迫った。

“家族を背景にした子ども”という視点は、ICF-CY が網羅しようとする児童青年期の子どもを捉えようとするとき、必須の視点である。保護される時期の子どもにとって、共に住む家族の影響が計り知れないことは明白である。一方で、障害者自立運動の中で展開された脱家族論では、親の囲い込みが成人後の本人の自立を阻むとされる¹⁾。だからこそ、児童青年期における家族の影響は、プラスマイナス両面から評価されなくてはならない。本人の活動・参加に家族がどのように影響し、生活機能全体をどのように変化させてきたか…その成長の過程を明らかにすることは、成人後の自立にも大きく関わってくるのである。

一方で、家族はあくまでも背景であり、主体は子ども自身にあることを親たちはいつも肝に銘じなければならない。ICF-CY の範疇は、成人の手前＝青年期までと考えても 20 年に満たないが、前文⁵⁾ が示すとおり、その間の変化、成長は著しい。親にとっては、まだまだ判断能力に欠けると思っていた本人が、いつの間にか家族の思いをはるかに超えた意思をもっていたことに驚かされたといったエピソードは少なくない。“家族を背景にした子ども”という視点をもつことは、同時に、子ども本人が、あくまで背景である *e310* 家族とはまったく別個に存在していることを改めて意識することでもある。

2. 家族とは誰か

ICF には環境因子の中に、*e310* 家族 (*immediate family*) というコードがある。*e315* 親族 (*extended family*) と比較して直訳すれば、「最も近い家族」というコードであるが、そもそも「家族」という言葉には、すべての歴史上の時代をとおして、すべての地域において、真実であるといえるような単一の概念など存在しない²⁾ といわれている。家族の境界は、法律

においても血縁においても定義づけられないものなのである。家族とは誰かを問うとき、その答えは、その子どもの所属する社会の文化的・社会的な環境に応じて変わってくる³⁾。ICF-CY が“家族を背景にした子ども”を語ろうとするならば、少なくとも、その子自身にとって「家族とは誰か」を明確にする必要があるだろう。

そのためには、*e310 家族*のコードには詳細分類が必要である。現在、このコードには、父親、母親、兄弟姉妹、配偶者、子、里親、祖父母などが全て含まれる。しかし、例えば、障害のある子への支援と関係を記述するとき、少なくとも親と兄弟姉妹の立場は大きく異なる。兄弟姉妹の中で本人が年上か年下かによっても、その立場はまた大きく異なるだろう。これらを同じ *e310 家族*というコードで示すことは難しい。“家族を背景にした子ども”は、家族の境界を明らかにし、家族の中の本人の位置を明確に示すことから記述しはじめるべきではないだろうか。初版の ICF-CY に、父親、母親、兄弟姉妹、配偶者、子、里親などの詳細項目が追加されなかったことは、非常に残念である。

3. 家族の中の役割

さて、ここで、ICF-CY の 211 項目の追加コードの中から、前文に掲げられた“家族を背景にした子ども”という視点で追加されたコードを探してみよう。活動と参加のリストの中では、*d 6302 調理の手伝い*、*d 6406 調理以外の家事の手伝い*、*d 6507 家庭用品の管理の手伝い*、*d 6606 他者の援助への協力*など、手伝いというコードがそれにあたるだろう。これらのコードによって、本人自身が主体的に家庭生活を営む場合とは違う、まさに家族を背景にした子ども、家庭の中で役割をもつ子どもの姿が浮かび上がる。

しかし、家庭生活における家族の機能は、家事機能に限らない。家族において子どもが果たす重大な役割が、実はもっと他にあるように思う。それは、「子のかすがい」と言われる役割であり、ときには家族の基盤を支えるといってもよいものである。しかし、子どもはその存在だけでかすがいになりうると想定し、無視するのは早計である。子どもによっては、それだけが唯一の役割である子もいるかもしれないし、逆に、微妙な感情の動きが読み取れないばかりに、他の兄弟姉妹に比較して、そうした役割を果たしにくい子どももいるかもしれない。どちらの例であっても、この役割が他の家族成員に対して重要な意味を持つことは少なくない。

例えば、*d 660 他者への援助*の詳細項目にある *d 6600 他者のセルフケアへの援助*や *d 6602 他者のコミュニケーションの援助*等に並べて、「他者の精神的安寧の援助」等「かすがい」を示す項目を追加することをここで提案したい。

4. 遊び

ICF-CY で追加・修正されたコードの中には、「遊び」に関するコードもある。確かに、少なくとも先進諸国においては、遊びは子どもの生活の中心であると言ってもよいだろうし、子どもと遊びは切り離せないように感じられる。しかし、「遊び」という言葉もまた、定義が

明確な言葉ではないだけに、コードの使用も難しい。

ICF では、*d 920 レクリエーションとレジャー*に既に遊びのコードが示されている。この *d9200 遊び play* と、ICF-CY で追加された *d 880 遊びへの取組 (engagement in play)* の違いはどこにあるのか。また、ICF-CY には *d 880 遊びへの取組*とともに、*d131 ものをういた動きを通した学習 (Learning through action with objects)* というコードが追加され、その定義や下位分類の中に遊びの要素が含まれているが、が、ここでいう遊びと学習の違いは何なのか。

親というのは、おそらくは動物的本能で子どもの自立成長を願い、子どもの教育を役割の一つとし、そのために働こうとするものである。幼い頃から機能訓練を受ける子どもたちの親は、折に触れ、「遊び」が発達を促すもっとも有効な学習であることを知ることになる。その結果、子どもが遊ぶ様子を発達の指標として観察し、わが子をより高次の遊びの段階へと導こうと教育しようとしがちである。このとき、子どもにとって遊びと学習は曖昧になる。

ICF-CY の分類コードに遊びのコードが追加されたこと自体には異論はない。しかし、特に主要な生活領域に分類された *d880 遊びへの取組み*については、十分な配慮が必要であると思う。遊びの研究は、発達心理学の王道でもあり、ピアジェをはじめとする多くの研究者が遊びを通して子どもの発達を段階的に分類してきた。その中で、*d880*では、社会的発達の観点から遊びを分類したパーテンの遊びの発達段階⁵⁾が採用されている。すなわち、ICF-CY は、遊びを *d 8800 一人遊び*、*d 8801 傍観的遊び*、*d 8802 並行遊び*、*d 8803 共同遊び*として分類した。パーテンは、この発達段階を年齢によって区切り、子どもが社会的存在に発達していく過程として示している。一人遊びよりは傍観的遊び、傍観的遊びよりは並行遊びが、より社会性が高くなる高年齢の子どもの遊びであると理解される。

私は、この分類に触れた親たちが、障害のあるわが子の遅れを分類コードによって診断しようとしないうちに危惧する。ICF は基本的にアセスメントのツールではない。あくまでも分類コードであり、これを活用して、障害のある人の生活機能を記述しようとする共通言語である。その使用にあたっては、WHO が ICF 付録5で記述したように「あらゆる努力にもかかわらず、烙印やレッテル貼り⁶⁾」とならないように、繊細な配慮が必要なのである。

前述のように、子どもたちの「遊び」は、親たちによって簡単に「学習」にすり替わる可能性もある。遊びとは何か、学習とは何か、遊びを通した学習とは何か、レクリエーションとレジャーの遊びとは何か、私たちは今後 ICF-CY の活用と研究を通して、それらの定義についても精査していく必要があるのではないだろうか。

5. 学校教育での適用

子どもの環境は幼児期から青年期にかけて、量・質ともに拡大・複雑化、変化する。家庭というごく限られた環境の中で、家族というごく近い存在に守られて生活していた子どもが、やがて地域の公園での社会的な出会いを経て、幼稚園や保育園、やがて学校へと、その生活の場を広げていく。ICF-CY は、成人期までのあいだに子どもが参加するであろう主要な生活領域として ICF にある *d 810 非公式な教育*、*d 815 就学前教育*、*d 820 学校教育*、*d 825 職業訓練*、*d 830 高等教育*に、詳細コードを追加している。

*d820 学校教育*には、以下のような6項目が追加され、ICF-CY によって、学校教育への参

加状況は、より詳細に記述できるようになった。

d 8200 学校教育プログラムの適用と次のプログラムへの移行

d 8201 学校教育プログラムへの継続的参加

d 8202 学校教育プログラムの内容の達成

d 8203 学校教育プログラムの修了

d 8204 その他の特定の学校教育

d 8209 詳細不明の、学校教育

例えば、何らかの事情で学校に行けない状況になった子どもを表現する場合、これまでの分類では、コードが一つしかなかったので、*d 820. 4 (学校教育への参加は実行状況：不参加) **と表現するにとどまった。しかし、ICF-CY では、*d 8201. 4 (学校教育プログラムへの継続的参加には、参加していない) **が、教師のフォロー（数日に一度の訪問やホームワークの提示など）や、他の支援者や保護者との連携により、*d 8202. 2 (=プログラム内容の達成に関する実行状況は部分的制約) **にとどまっている…ということも表現できるようになったのである。

不登校の子どもを持つ親にとって、この差は大きい。たったひとつのコード *d820* で記述したときには、完全な不参加でしかなかったわが子は、ICF-CY の分類のもとで、学校教育に参加しようとする子どもとなり、その背景に家族や教師の努力が浮かび上がる。そして、それは学校にとって、教師にとっても示唆に富む視点になる。学校という建物の中でだけ学校教育が成立すると考える発想から、訪問教育や院内学級と同様に、学校に来られない生徒も支援次第で学校教育に参加することができるという発想へ。多様化する教育の形を模索する上でも、詳細分類の追加は大きく貢献するだろう。

* 厚生労働省大臣官房統計情報部発行の活動と参加の評価点基準（暫定案）」⁴⁾に従って評価した。

6. まとめ

“家族を背景にした子ども”という視点をもって ICF-CY が発行されたことは、特別支援教育の中で保護者が重要な支援者として位置づけられたことと重ね合わせ、障害のある子を育てる親として襟を正す気持ちにならざるを得ない。しかしそれは、決して介護の責任者として子どもの人生を囲い込もうとする方向ではなく、環境因子の一人としての客観的な自覚であり、逆に愛情に基づくきわめて主観的な立場にある一人としての覚悟でもある。ICF-CY の活用によって、本人はもちろん、家族一人一人の生きやすさが模索できればと期待する。

引用文献

- 1) 安積純子・岡原正幸・尾中文哉・立岩真也：生の技法；家と施設を出て暮らす障害者の社会学，藤原書店，1995.
- 2) Flandrin,J.-L. : Families in Former Times . Cambridge:Cambridge University Press ,1997.（森田伸子・小林亜子訳：フランスの家族 アンシャン・レジーム下の親族・家・性．勁草書房，1993.）

- 3) Gubrium,J.and Holstein,J : What is family? . Mountain View . CA : Mayfield, 1990. (中河伸俊・湯川純幸・鮎川潤訳：家族とは何か―その言説と現実―. 新曜社, 1997.)
- 4) 厚生労働省大臣官房統計情報部：生活機能分類の活用に向けて―ICF(国際生活機能分類)活動と参加の基準(暫定案), 厚生統計協会, 2007.
- 5) 高橋たまき：乳幼児の遊び, 新曜社, 1984.
- 6) WHO : International Classification of Functioning, Disability and Health: Children and Youth Version, ICF-CY , ix- x x vi, 2007.

(下尾 直子)